

トピックス

マーサ・ヌスバウムとリベラル教育

バイオ環境学部食農学科特別教授 竹熊耕一

マーサ・C・ヌスバウム (Martha Craven Nussbaum, 1947 -) はシカゴ大学ロースクールで教鞭をとる現役の大学人である。ギリシャ哲学の研究からスタートした彼女の仕事は、西洋古典学、法哲学、倫理学、女性学と幅広い。研究室に籠らず、社会正義の実現に向けて発言し行動する知識人である彼女の知名度は世界的に高く、わが国でもその人と思いを概説する書物が公刊されるほどである¹。

ヌスバウムが関心をもつテーマの一つに高等教育の開発と普及がある。古来、アメリカを除く諸国では、高等教育は専ら専門教育・職業教育の範疇で考えられてきた。これに対してアメリカの大学教育は、学生共通の「一般教育」(general education) を必須の構成部分に据えてきた。その背景には、デモクラシーを支える「市民的徳性」(citizenship) の涵養を目的とする「リベラル教育」(liberal education) の伝統がある。ヌスバウムは、自国がそうした人間教育の普遍的な理想を堅持してきたことを高く評価し、自らもその進展に寄与したいと熱望する人物である。リベラル教育の理想が世界各地の大学から広く浸透し、そこから人種や民族、宗派、ジェンダー等による分断や敵対をのりこえた地球人

の真にグローバルな結合が進むこと、言い換えれば、かつて古代の哲人が夢見た「世界市民」の共同体へ人類社会が着実に歩を進めることこそ、彼女の宿願とするところである。小稿は、そうした壮大なヴィジョンをもつ理想主義者ヌスバウムの教育論の骨格を知る恰好の小論を要約し——必要に応じて他の著作も参照しながら——紹介するものである²。

1. リベラル教育の真価

「全米カレッジ・大学協会」(Association of American Colleges and Universities, 略称 AAC & U)³ の機関誌 Liberal Education の2004年冬季号に寄せた彼女の論稿のタイトルは「リベラル教育とグローバル共同体」(Liberal Education & Global Community)⁴。その冒頭からヌスバウムは、リベラル教育の今日的意義を強調する。すなわち真正のリベラル教育は、「万人を包み込む地球市民 (inclusive global citizenship) という理念」、そして「互いを思いやる想像力 (compassionate imagination) の可能性」の二つの上に成り立っている。およそ教育には何らかの理想や期待が籠められているが、リ

1 神島裕子『マーサ・ヌスバウム——人間性涵養の哲学』中公選書、2013年。そこでは思想家としてのヌスバウムが、「新アリストテレス主義」「政治的リベラリズム」「コスモポリタニズム」の三本軸で解説されている。

2 各章の見出しは、筆者が内容に即して適宜附けたものである。

3 この組織の歴史や活動、性格については、拙稿「〈リベラル教育〉の新展開——21世紀アメリカの大学改革構想」『京都大学総合研究所所報』第15号、2014年3月、で簡略ながら触れた。

4 <http://www.aacu.org/publications-research/periodicals/liberal-education-global-community>

ベラル教育の特性は、この二つの基盤ゆえに、グローバル化とともに地理的な隔たりや文化上の相違や相互不信から起る世界の諸々の分断状態を乗り越えていく逞しい潜在力を有するところにある。それゆえ、これを広く推進し、かつ時代の要請に沿って改修を施すことは、「教育者であり同時に市民である」自分たちの「もっとも胸躍る、そして何よりも緊急の務めの一つ」だとヌスバウムは調子を高めている。

この前置きに続いてヌスバウムは、当時まだ生々しい記憶だった2001年9月11日の「同時多発テロ事件」の影響に触れる。アメリカ人がかつて経験しなかった恐怖の体験は、「二極化」(polarization)——かけがえない〈自分たち〉とそれを取り巻く邪悪な〈彼ら〉という単純な二分法で世界を捉えようとする心性——を彼らにもたらした。「諸文明の衝突」という隠喩が軽々に用いられるようになり、地球上の人びとが複雑な相互依存関係を作り、そこで種々の問題を共有しながら生きている世界の実像からあえて眼をそらすようにする姿勢が蔓延しつつある。

こうした悪質な傾向には「正確な世界知識と自己批判の習慣」に拠って立ち向かうのが至当であるが、しかし、そうした理知の働きよりも「もっと基本的な何か」(something more fundamental)が欠落している点を問わなければいけない。その「何か」は、前掲の「互いを思いやる想像力」にほかならない。ヌスバウムは、自国民が、これまでアメリカ市民を「想像力と慈しみに富んだ世界市民」(imaginative and compassionate world

citizens)に高めてきたリベラル教育の伝統に立ち返り、「アメリカの外側で暮らす人々」の現実にも心を開く届かせて真摯な事態改善の道を探していくことを切望している。

2. 世界の変化とリベラル教育

リベラル教育の淵源が古代ギリシャ・ローマに遡ることは万人の知るところだろう。しかし「自由市民」にふさわしい一般教養への希求が、大学教育の基幹的部分を規定する規範として現実に生きている国は今やアメリカのみ。高等教育は、19世紀の世界的普及の中で、専門学習と職業準備を旨とするものに変容したのである。

ところがヌスバウムによれば、アメリカ独自のこの教育理念が——「アメリカ的」なるものがとかく疑問視される当今の趨勢にもかかわらず——今やヨーロッパやアジアの国々でかなりの関心を集めるまでになり、現実にリベラルアーツ型のカレッジが各地に誕生している。彼女自身、リベラル教育の意義や可能性を論議する会合への出席、あるいは実際のカリキュラム策定事業への参画のために、世界を飛び回っている状況だというのである⁵。

リベラル教育はなぜそのように国境をこえて人びとを惹きつけるのか。

ヌスバウムはこう説明する。すなわち、世界のどの国もその内部で、宗教的、民族的な対立に直面している。同時にそれらの国同士の間には文化的、宗教的緊張の関係がある。移民が急激に増加する一方で出生率が低

5 ヌスバウムは、近年ではスウェーデン、オランダ、イタリア、ドイツでの会議に自分が出席したこと、さらにバングラデシュで女子のためのリベラルアーツ・カレッジの創設にも関わったことをここで報告している。彼女はまた、あるインタビューに答えて、「たぶんこのリベラル教育の分野が、私が公的な哲学者として最も影響力のある分野だと思います。」と述べている。神島裕子、前掲書、273頁。

下しているヨーロッパでは、かつてなかったようなかたちの異種混交が厳然たる事実となっている。そうした国々では、従来の高等教育のカリキュラムが、複雑な多民族社会や「連結・連動する世界」(interlocking world)の中で生きる市民の養成に必ずしも役立たないことに気づき始めた。例えば異文化研究(ethnic studies)や女性学(women's studies)を、学生が誰でも当たり前受講できるアメリカの大学の一般教育プログラムは、その意味で魅力的なのである。

一方、〈恐怖〉と〈二極化〉に覆われつつあるアメリカ本国においても、リベラル教育の緊要性は高まっている。相互依存が深まっていく世界では、飢餓、疾病、環境の劣化といった問題の解決、さらに国家間の安定した平和の維持という課題にとって、国際的な協同は絶対に欠かせない。ところが多くのアメリカ人は強大な国力を盲信し、英語とアメリカ流の生活に浸かってさえいけば周囲の問題はすべて片付いていくと信じ込んできた。この「罪深い自己満足の心の習慣」を一掃し、「世界の諸問題をしっかり考えることのできるグローバルな市民」としての自覚へ人びとを導くために、リベラル教育の活性化が何よりも急がれるのである。

3. 人間性の涵養——リベラル教育の目標

これまで時局的な背景からリベラル教育の効能を説いてきたヌスバウムは、ここから、その原理的な根底に論及していく。「市民的徳性」の中心を三つの側面から論じるこ

の箇所は、初期の著作『人間性の涵養——リベラル教育の改革についての古典派の弁明』(Cultivating Humanity: A Classical Defense of Reform in Liberal Education, Harvard University Press, 1997.)⁶で彼女が詳説した考察のいわば短縮版であり、彼女の講演や評論などに再三登場する内容である。

(1) 批判的思考(critical thinking)と自己検証(self-examination)

リベラル教育の成果は、批判精神をもった「公衆の文化」(public culture)を創出するところにある。その文化を構成する市民の資質としてヌスバウムが挙げるのは、分析的思考、論拠に則った議論、そして積極的に討論に参加する姿勢である。省みると、性急かつ杜撰な思考から、議論というよりはむしろ悪罵の応酬となるのが近代のデモクラシーであった。これに替わる「熟議を重んじるデモクラシー」(deliberative democracy)は、批判的な分析と相手への敬意を伴った討議を美德と考える市民によって支えられなければならない。

デモクラシーをより思索的で自省的な性質のものに高めようと、対話を通して人びとを啓発して歩いたアテナイ市民ソクラテス。伝統や権威に盲従せず、理性の自由と自律のために自らの吟味を怠らぬよう説き続けた彼の名が、批判的知性の象徴としてここに現れる。

その上にヌスバウムは、かのセネカによるリベラル教育の理念を提示する。「リベラル」の意味は、学徒たちを慣習や伝統のくびきか

6 この書の冒頭(p.9)に、「市民として、そして一般人としての役割に向けて、人間性の全体(the whole human being)を涵養する高等教育」という、ヌスバウムによるリベラル教育の定義が述べられている。「人間性の涵養」という表現は、古代ローマのストア派の哲学者セネカ(『怒りについて』43)から借りたものである。

ら「解放ち」(liberate)、彼らが自らの責任において思索と弁論を展開するよう促すところにある⁷。「リベラル」教育の務めは、一人ひとりの人間らしさ——自己を知り、自己を統御し、さらに、出自や身分、性、民族に関係なく生きる仲間すべての人間性を敬重する能力——を開花させることだという趣旨の『道徳書簡集』の数節(第33、第88)が引かれている。

グローバルな世界を、利害と不平等による分裂ではなく、あの「互いを思いやる想像力」によって包んでいく——そうした21世紀に望まれるリベラル教育には、もはやかつての有産市民、職業訓練や肉体労働とは無縁の階層の専有物的な性格はかけらもない。その発展は紛れもなく人類全体の希望である。「私たちは、人の命も利潤獲得の道具と見るようなグローバル・マーケットを介して他地域と繋がっている。もし高等教育機関がより豊かな人間関係のネットワークを築かなかつたなら、私たちの互いの交渉は、為替の交換と収益の貧弱な基準によって仲介されることになるだろう。」

「助け合う人びとの、平和で実り豊かな世界」——いささか牧歌的で素朴すぎる表現のようだが、これがヌスバウム自身の平易な言葉で語られた、リベラル教育の終着点なのである。

(2) 「世界市民」(citizens of the world)

21世紀に生きる人間に要請される市民性は、ある一つの地域もしくは集団にのみ適合するようなものではない。そこには自らを、「承認」と「配慮」の絆によって「すべての他人」と結ばれている者と見る「世界市民」の視野が欠かせない、とヌスバウムはいう。

「世界市民」の理念はギリシャ・ローマ以来の普遍の人間像である。しかしさまざまな条件下で多種多様な要素が複雑に繋がり、あるいは絡まり合った現代世界で「人間性の涵養」に努める私たちには、人間理解——人間共通の欲求や目的が、異なった環境の人びとの間でどれほど違った形で満たされるものかを知ること——のための膨大な知識が必要となっている。

教育はその困難な課題に立ち向かわなければならぬ。率直に言って、アメリカ人にはアメリカ以外の、あるいはヨーロッパ以外の文化は縁遠い。ヌスバウムの考える学士課程の必修科目は、第一に世界史の初歩、そして世界の主な宗教の基礎的な理解に関する科目である。その上で学生には、少なくとも一つ、未知の文化について「専門的に」突っ込んだ学びを行なわせる必要がある。それは「別の機会にも使える道具を手に入れる」ことになるだろう⁸。

そして改めて彼女が——英語圏の若者に対して——強調するのは外国語の学習である。たとえ一つの言語でもそれを習得することは、グローバルな理解を進めるうえで「この

7 「リベラル教育」は人を不当な束縛から解放し、精神の自由を推奨する教育の意味である、という解釈は、セネカ以降、啓蒙思潮を経て、20世紀のアメリカで(デューイを中心に)広まった。しかし、もともと有閑市民が特権的に「自由人の学芸」(artes liberales)を修める機会としてあったリベラル教育を、歴史的社会的文脈を無視して、「人を自由にする」(liberating)教育という「後付け」の理屈で取り上げるのは問題である。大口邦夫『リベラル・アーツとは何か——その歴史的系譜』さんこう社、2014年、第7-8章、参照。ヌスバウムはそうした考証と無関係に、リベラル教育のあるべき姿を直観的に洞察したセネカを顕彰しているのである。

8 この辺りのリベラルな学修についての具体的な提案は、漸く翻訳が出た彼女の『経済成長がすべてか?——デモクラシーが人文学を必要とする理由』岩波書店、2013年、の第5章「世界市民」に詳しい。この書物の原題は、Not For Profit: Why Democracy Needs the Humanities, Princeton University Press, 2010.

うえなく重要な」(extremely important) 部分なのである。世界を「別の文化の切り取り方」から見て、その中で大切とされることを表現する言語コミュニケーションの活動は、「翻訳がなぜ常に不完全で一つの解釈に過ぎないのか」という重い真実を示唆する。そして、知性を備えた人たちなら皆同じ人生観を持っている、というわけではない、という当たり前の事実を体得させてくれる。

「私たちは、世界の中での自分の役割について、もっと探究心をもち、もっと謙虚にならなければいけない。」そうした成長を実現するのは、学士課程の教育の改善によるほかはないのである。

(3) 物語的想像力 (narrative imagination)

一般の市民は、事実に基づく知識だけではうまく物事を考えることができないものだ、とヌスバウムはいう。そこでリベラル教育の成果として求められる3つめの資質は、「物語的想像力」と呼ぶべきものである。彼女はそれを、「自分と違う人の靴を履くというのはどんなものだろうかと考える能力」と巧みに表現する。その人の生きる姿としての「物語」の「思慮深い読者」となって、そうした立場に置かれたならそのような感情や願望や欲求をもつのは自然であろうと諒解する能力である。

私たちは、かの『エミール』の中でルソーが語った言葉——「貧しい人や虐げられた人への同情心をもった立派な市民を作るのは、若い日々に人間の苦境についての物語的想像力を十分に養う教育を受けることだ」——を

想起しなければならない。文学や芸術の諸教科は、そのように豊かな人間理解と愛情を、文芸、音楽、美術、そしてダンス等のさまざまな作品との関わりを通して、私たちの内に育むのである。

あらゆる時代のあらゆる社会はそれぞれ特有の「盲点」をもっていて、自分たちの文化の範疇にない集団に対して無知で、彼らに鈍感な接し方をしてしまう。だが美術作品はしばしば、私たちのこの鈍感さを覆し、「見過ごされた人たちの」内面にある豊かなヴィジョンによって私たちの心を打つ。だから私たちは、「盲点」を補う「内なる眼」(inner eyes)⁹を、学生の精神に涵養する必要があるのだ、とヌスバウムは説く。芸術の学びは学生にとって、ジェンダー、人種、民族性、異文化といった諸問題との出会いでもある。芸術の講義はまた、「世界市民」の講義とも連関する。芸術作品の多くは、「自分にとっての異文化の到達点とその苦難の道」を理解するかけがえのない入口となるのである。

ヌスバウムは自らを「古典的な」リベラル教育の唱道者と位置づけている。それは前述の歴史や語学、そしてさらに文学藝術を加えた人文学の素養こそが「人間性を涵養」する最良の源泉だという、西欧のヒューマンイズムの伝統への信頼に因る。コミュニケーション・スキルや数量的リテラシー、情報リテラシー等の新しい「知的かつ実用的スキル」が、21世紀のリベラル教育の「主要な学習成果」(essential learning outcomes)として比重を高めてきた¹⁰。しかし彼女からすれば、あの「互いを思いやる想像力」の底深い根源

9 アフリカ系アメリカ人の小説家、文藝評論家、エッセイストであるラルフ・ウォルド・エリソン (Ralph Waldo Ellison, 1914-1994) が小説『見えない人間』(Invisible Man, 1952年)の中で用いた表現。

10 注3に挙げた拙稿では、近年のリベラル教育の革新的な傾向を簡略に紹介している。

性には及ぶべくもない、というところであろう。

4. 発展途上国における女性教育

紙数が尽きてきた。

ヌスバウムは、芸術を特別な焦点とするリベラル教育の理想が、発展途上国の多数の貧しい女性たちに高等教育の機会を拓けようとする努力のなかで輝いていることを、最後に報告する。

南アジア——インド、バングラデシュ、パキスタンといった国々における女性教育の不十分さ。たとえ運よく高等教育の機会に恵まれても、彼女たちには狭い範囲の基礎的な職業訓練しか用意されていない。それは経済的な貧困の問題ではなく、公共計画の遅れによる。文化的な習慣によって、常に受け身で自己主張しないように訓練されてしまう彼女たちをジェンダーの支配的な前提から解放するために、リベラル教育の果たすべき大きな役割がそこにある。

南アジアでは、リベラルアーツ・モデルの女性教育機関が、ドバイやカラチで新しく活動を始めた。ヌスバウム自身がカリキュラム計画に関わっているのは、バングラデシュに創設されつつある、その名も「アジア女性大学」(Asian University for Women)。そこでまとめられたカリキュラム計画書の一節を、彼女はこの小論の総括でもあるかのように引用している。

「カリキュラムのこの部分 [人文学] の全般的な目標は、次のような若い女性を産み出すことでなければならない。すなわち、自力で識見のある考え方ができ、自分たちの地域の現在の動向と諸問題についての議論に、一般に

受け入れられている考え方を批判する力、自分自身の考えと自発性に対する十分な自信、そして自分とは異なった考え方をする人びとへの敬意と理解とをもって参加することができる女性を。そうした女性が、世界の歴史、世界の宗教、そしてグローバリゼーションや他の関連した緊急の諸問題をめぐる倫理的な討論について広く一般的な知識を得ること、そこで彼女たちが倫理的問題に強く目覚めて、その討論の思慮深い参加者となっていくことは、大変重要である。同時にまた、こうした女性たちが想像力を羽ばたかせて、芸術を通じた自己表現を行ったり、あちこちで苦境にある人びとについて独自の考えをしっかりとつよようになることもまた、大変重要である。」

深い人間愛と知性を備え、世界の問題解決に自信とゆとりをもって自ら参加していく女性たち——その磨かれた人間性の柱となる共感的な想像力を育む人文学や芸術は、ところが実は、深刻な危機に瀕している。アメリカの大学で進む費用削減と職業準備重視の傾向は、民主的市民精神の土壌であり、この国の誇りであった人文主義教育を、徐々に干上がらせているのである。そのことへのヌスバウムの怒りは、この小論では末尾に僅かながら窺われるだけである。リベラル教育の真価を毀損する合理化の波に敢然と対峙する彼女の本領は、註8に掲げた近著で遺憾なく発揮されていることを付け加えておきたい。(了)